

新刊
紹介

"I love my books as drinkers
love their wine; The more I
drink, the more they seem
divine."

内田智雄編（法学部教授）「訳註中国歴代刑法志」 東京・創文社、B5判二八三頁、定価三〇〇〇円。

本書は、古くから高度に発達していた中国の刑法のあとをたどりまた中国古法とゆかりの深い日本古法を考えるについての、必読の書である。

中国とヨーロッパとは、刑法の社会的な成立ちが異っているが、中国は、刑法にかけては世界の先進国であった。かつて中田博士は「七世紀の唐の刑法典は、ヨーロッパ十九世紀の刑法典に比べて、おとるも

のではない」といわれた。その讃辞は、さらに唐よりも古い時期の中国の刑法に対しても与えらるべきである。そして唐の刑法のもつ学問的な高さはさすがに大したものと思うが、しかしそれは一つの完成状態を示しているようなもので、それまでの成立過程の面白さは歴代の刑法志の中にある。

本書は、唐以前の刑法の、このような歴史を書いた漢書刑法志、晋書刑法志および魏書刑法志の原文と、その翻訳と、注との三部分から成っている。その原文については厳密な校訂が加えられ、その校訂のためには、敦煌発見の文献、および古版本など、あたうかぎりの諸資料が準備された。

そして訳と注のためには、多くの研究討議と書換えがくり返し行なわれた。この研究事業達成のためには、同志社大学教授内田智雄氏のほか、えりぬきの研究者諸氏が、きんみつな共同研究組織を作り、昭和三十一年以来、たつぷり八カ年の歳月もかけたものである。（仁井田陞 朝日新聞 昭和40年1月11日付）

松井七郎・古米淑郎（経済学部教授）共訳「労働運動の分裂と統一」（アーサー・J・

ゴールドバーグ原著）東京・好学社、A5判二七六頁、定価七八〇円。

アメリカの労働運動史に関する著作で、AFL発達史の研究、またそれから分裂したCIOの歴史の紹介はあるが、一九五五年この二つの大組織がどのような経緯と背景の下で統一されたかについての具体的研究はほとんど存在しなかった。

日本では職業別の古さをもつAFLの中から、新時代の産業別のCIOが分裂独立したという説明は一般化しているが、何故この対立する二つのものが、再び統一せざるを得なかったかの秘密は、これまでどの研究書も語ってはくれていなかった。

原著者ゴールドバーグ氏はかつてのCIOの顧問弁護士、労働長官で現在の最高裁判事であり、この統一の表と裏とを悉知している唯一の人である。

また松井・古米両教授は、長年にわたってアメリカの労働組合研究に打ち込んできた最適の訳者である。労働運動についての国際比較の重要性が高まっている折から、労働組合の研究者だけでなく、組合の指導者が、本書から日本の労働組合のいき方に

ついで教訓をひき出すことを望んでやまな
い。
(大河内一男)

同志社大学人文科学研究所編

「熊本バンド研究」―日本プロテスタンテ
イズムの一源流と展開

東京・みすず書房、A5判六六〇ページ、
三〇〇〇円。

明治九年秋、熊本から同志社に入學した
三十余名の人びとは、正しく創草期同志社
の基盤形成に絶大な寄与をなした。いわゆ
る熊本バンドとは、こうした一団に付され
た呼称である。彼等、熊本洋学校出身者は
同志社の基礎を形成したばかりでなかつ
た。日本組合キリスト教会の幹部として、
明治期、大正期にわたって、日本プロテス
タンティズムのうづ潮の目となり、あるい
は、その時代の思想形成の指導的な役割を
果たした人、民族的近代国家形成過程で多
彩な言論活動を展開した人、実業界に身を投
じた人、政治家、教育家等々彼等の歩んだ
道は多種多様であった。しかも彼等の底に
流れる、青春の日に烽火と燃えた奉教の誠
は、バンドの名にふさわしく、老いてもそ
の交情はこまやかなものであった。本書

は、総論において、こうした熊本バンドの
成立の歴史的・社会的・思想的背景から、
奉教への系路を原史料にもとづいて丹念に
追求し、その奉教の性格を綿密に検討して
いる。

各論では、小崎弘道、海老名弾正、宮川
経輝、金森通倫、横井時雄、山崎為徳、森
田久万人、下村孝太郎、藏原惟郭、市原盛
宏、浮田和民、徳富蘇峰らがそれぞれ追求
される。各論の特色も徹底した資料調査か
ら出発し、それぞれの人物を新しい視角か
ら鋭角的にとらえて、バンドの思想の航跡
をさぐるうとしている。なお、本書には、
資料篇として森田久万人のラーネッド講義
ノートのほか、熊本県立図書館に所蔵され
る藩庁文書中の関係史料、同じく熊本北
岡文庫収蔵の関係史料、逗子の徳富敬太郎
氏所蔵文献が収録され、さらに、バンド成
員並びに関係者の雑誌、新聞に投稿、掲載
された論文のリスト、および詳密な年譜が
付載されている。従来のバンド関係文献の
好事家の性格を完全に脱皮し、日本プロテ
スタンティズムの一源流に本格的究明の斧
鉞を入れたものと称しえよう。
(杉井)

世界はひとつ

新刊紹介「安中市話」紹介中に出てくる
オランダ大使館参事官 Van Gulick 氏は、
同志社へ二代 (Sidny + Leeds) のわたり、
日本へは一族 (O.H. Mrs. J.T., Julia A.)
を挙げて伝道した宣教師ギュリック家の欧
洲故地における中世以前の同族の子孫と察
せられる。ギュリックという姓はライン河畔
のグリック城から出た姓でドイツでは Von
Gulick と言い、米国へ移住した一分派も
長く Van Gulick と言ったが、十九世紀
(?) に入ってからであろうか、Van を削つ
て米国化した。シドニー・ギュリックは同
志社神学校で神学と進化論を講じ、帰米後、
加州の排日運動反対に立ち、その後も日米
両国民の理解増進につとめ、国交上大きな
貢献をして晩年勲三等を贈られたが、歐洲
に残る中世紀の同族の子孫が、全く別の途
から戦後の日本へ来て、安中の修史を刺戟
したとは面白い因縁で、今更ながら世界は
ひとつの感を催さしめる。
(T)